青年海外協力隊員レポート

マラウイ・レポート②

「生きるとはどういうこと？　幸せってなんだろう？」

酒井康子（西古泉）

看護師・保健師として働く中で、生死に関わる大勢の方との出逢いがあり、前記のような問いがつきまとっていました。

日本は著しい発展をもたらし、高度医療で人命を救えるようになりました。しかし、クオリティー・オブ・ライフ（生命の質）を問う場合、問題も多々あります。今一度「人が生きると言うこと、幸せの意味を違った角度から考えてみたい。」これが協力隊参加への動機のひとつとなりました。

マラウイは世界でも極貧の国で、社会基盤も整っておらず、保健医療においても問題が山積みです。

汚染された水の利用による環境から引き起こされる、コレラ・赤痢・食中毒・寄生虫・マラリアなどの発生。旱魃（かんばつ）などの厳しい環境の下、食料不足による栄養失調の多発。適切な保健医療がうけられないことによる感染症（特にHIV/AIDS）の蔓延（まんえん）と死亡率の増加。その結果、平均寿命が37・5歳。（乳幼児死亡率が高いため全体の平均寿命が下がるが、働き盛りの若者の死亡率もHIV/AIDSのために増えてきている。）

このような中での派遣要請内容は、公衆衛生の改善と疾病予防、母子保健の改善・エイズ対策でした。

実際任地に行ってみると、スタッフはいない、薬や医療器材はない、あるのは外国の援助で建てられた診療所と大勢の患者さんでした。

▲5歳未満の乳幼児の体重測定を行い、健やかな成長をしているかどうかチェックしています。

助けを求めて遠くから訪れた人々を前に、なす術もなくただ息を引き取るのを見守るのは、精神的にもかなり辛いことでした。

JICAの協力隊活動では金銭や物質の援助は行わず、現地の人と協力して自分の知識や技術を駆使して現状を改善していくといった方式をとっています。

薬は各国の援助によりある所にはあるのですが、不正ルートで末端までは充分に届きません。不正ルートを正すのは困難であり、治療には限界があります。

また、人々は薬を魔法のように思っており、病気の原因や予防については正しい知識を身に付けておらず、予防対策は徹底していませんでした。

▲青少年を対象に、HIV・エイズの保健指導を行いました。

「予防に勝る薬はなし。」そこで、私は現地の保健・医療スタッフと共に村々や学校を回り、お金をかけずにできる衛生的な環境の整備や疾病予防の啓蒙活動を行いました。

しかし、援助慣れした現地の人々は薬やお金を要求するのみで、活動は思うように進みません。また、伝統医療が根強く残っており、現地人の支えとなっているのですが、弊害となっているのも事実でした。（特にHIV/AIDSや感染症の治療上で）

しかし、現地の方法や考えも取り入れながら、小さなことから少しずつ、あせらずあきらめず取り組みました。

2年間では大した成果は出ませんでしたが、学校保健を導入することで子どもたちに、だれかの助けを待つのではなく自らの手で自分自身や周囲の人々の命を守る保健の指導や、若い世代のエイズ予防クラブを活発にすることができました。

▶水道がない村で手を洗う習慣を身につけていただくため、手洗い場をトイレの横に設置する指導を行いました。